

忘れえぬ言葉

中垣芳隆

先日、歯の定期検診に十三に出かけたとき、偶然、歯医者でかつての同僚の S さんと遭遇。今は閉課程となった北野高校定時制で、当時は元気一杯の若手の女性教員。

エリート卵の集まる全日制課程は管理職として最高のやりがいを感じる事の出来た場所、一方、中学校卒業後すぐに入学してくる若者から 70 歳代の高齢の生徒まで、年齢も生活環境も多種多様な定時制課程は、人と人の関わりについて、はたまた人生について教えられることの多かつた得難い場所。

S さんとの思い出話 その 1

どんな悪天候でも学校を休まない高齢の在日の生徒さんたち。そのうちの一人に、なぜそんなに頑張れるのかと問うと「小さい頃は、戦争と差別で学校に行くことが出来なかった。おかげで脳みそが栄養失調です。そんな私らに、ここの先生は優しく教えてくれる。休めるはずがないですよ。」

その 2 化学物質過敏症の 3 兄弟 (注 参照)

ある日、出張から戻ると教頭から、A 中学の校長先生が化学物質過敏症の姉と弟の受験の相談で来校されました、との報告。応募資格に問題は無いものの、無事に教室で受験が可能かを診断するため、予備的に 2 人に教室で着席してもらおうと、10 分もすると強烈な頭痛、絶え間ない咳、などなどの反応で体調が悪化。

別室受験の応用で、淀川の寒風の吹き抜ける中庭に板で囲ったスペースを設けての臨時試験場で受験、入学後も授業は中庭教室で実施。数か月経過するうちに、府内の某私立高校で化学物質過敏症に対する学校側の無理解から不適切な扱いを受け、不登校気味に陥っていた長男が、妹、弟の二人が楽しく通学する様子に刺激を受け、北野高校に転入。教頭をはじめ、教職員の強力なサポートもあり、年齢の異なる 3 人のきょうだいが無事に同時に卒業、めでたしめでたし！の、避けては通れない話題に移った。

この機会に、敢えて S さんに問うてみた。「校長は先生方にご苦労さんですむけど、授業する先生たちから一度も文句を聞かなかったけれど、正味のところどう思ってた？」

S さん「判定会議の時の組合の分会長の Y 先生の言葉が答、覚えておられます？あの言

葉は教職員全員の総意でした。」

余り人の言葉に感動することはないのだが、あの時の Y さんの言葉の記憶はいまだに鮮明なものがある。

「社会的弱者にとってのセーフティネットが定時制課程の役割、そこで勤務する我々、教職員の責任です。2人の合格判定に異存ありません。」

私心のない、思い出すたびに清々しく小生にとり珠玉の言葉。

注 ・ 化学物質過敏症とは、非常に微量の薬物や化学物質（主に揮発性有機化合物）の曝露であっても健康被害が引き起こされるとする疾病概念。人体の薬物や化学物質に対する許容量を一定以上超えると引き起こされる。

- ・ 一家は、1997年、北里大学病院で宮田幹夫教授の診察を受け、家族5人とも中枢神経機能障害（化学物質過敏症）と診断された。宮田教授はその症状のひどさを見て「化学物質過敏症だが、まるでサリンの中毒患者。むしろ有機リンの中毒症状だ」と驚いた。

(中垣芳隆 教授／教員養成センター)
